



あかぎ 無限大 キャンプ



はじめに

「あかぎ無限大キャンプ」は、文部科学省の委託事業「体験活動を通じた青少年自立支援プロジェクト」として令和4年度から採択され、今年度の令和6年度で3年間の区切りを迎えることとなりました。

この間、前身の「限界突破キャンプ」での知見を活かしながら、7泊8日の本キャンプと各1泊2日の事前・事後キャンプという全体で2か月間に及ぶ長いスパンのなかで、子供たちが互いの関係性を構築したり、多様性を認め合える意識を醸成したりしていくにはどのようなプログラムづくりや指導が効果的なのか、見直しつつ実施してまいりました。

また、眼に関する共同研究についても、慶應義塾大学医学部眼科学教室、株式会社坪田ラボ、近視予防フォーラムとの4者体制での6年計画中の4年目となり、長期の自然体験活動がどのような形で眼に良い影響を及ぼすかについても知見を積み重ねていただいております。

今年度は全3回のキャンプを通じて、登山をはじめ予定のプログラムを概ね実施することができました。また、参加者自身の満足度も高かったことがアンケートのみならずそれぞれの表情からも見て取ることができました。長期の体験活動が子供たちに及ぼす良い影響が多く見られた一方で、人的・財政的にもさまざまな制約があるなかで効果のあるプログラムをどのようにして持続的に運営していくのか、昨今ならではの新たな課題も浮かび上がってきたところです。

本報告書が、青少年教育施設をはじめとする全国の青少年教育関係者の皆様の活動の参考になりますよう、ひいては青少年の体験活動の推進の一助となりますことを祈っております。

国立赤城青少年交流の家 所長 金澤 哲哉

目次

はじめに

1. これまでの「あかぎ無限大キャンプ」

(1) 令和4年度（1年目）	01
(2) 令和5年度（2年目）	02

2. 事業概要

(1) 事業の趣旨	03
(2) 目指す子供像	03
(3) 令和6年度文部科学省委託事業	04
(4) 手立て	04
(5) 事業概要	04
(6) 推進委員会の概要	05

3. 事業内容

(1) 日程	06
(2) プログラムデザイン	07
(3) 各キャンプの内容	08
ボランティア研修	08
①事前キャンプ	09
②本キャンプ	10
③事後キャンプ	11
(4) 安全対策	12

4. 調査結果

(1) 当所実施のふりかえりシートからみる参加者の変容	13
(2) あかぎ無限大キャンプにおける社会情動的スキルの変容（3年目）	15
(3) 慶應義塾大学医学部・国立赤城青少年交流の家・株式会社坪田ラボ・近視予防フォーラムとの共同研究	17

5. 成果と課題

(1) 成果	19
(2) 課題	19
(3) 推進委員より	20

6. 3年間の取組とその成果

(1) ステージを4つに分けたプログラムデザイン	21
(2) 計画的な「話し合い」	21
(3) その他	21
(4) おわりに	22

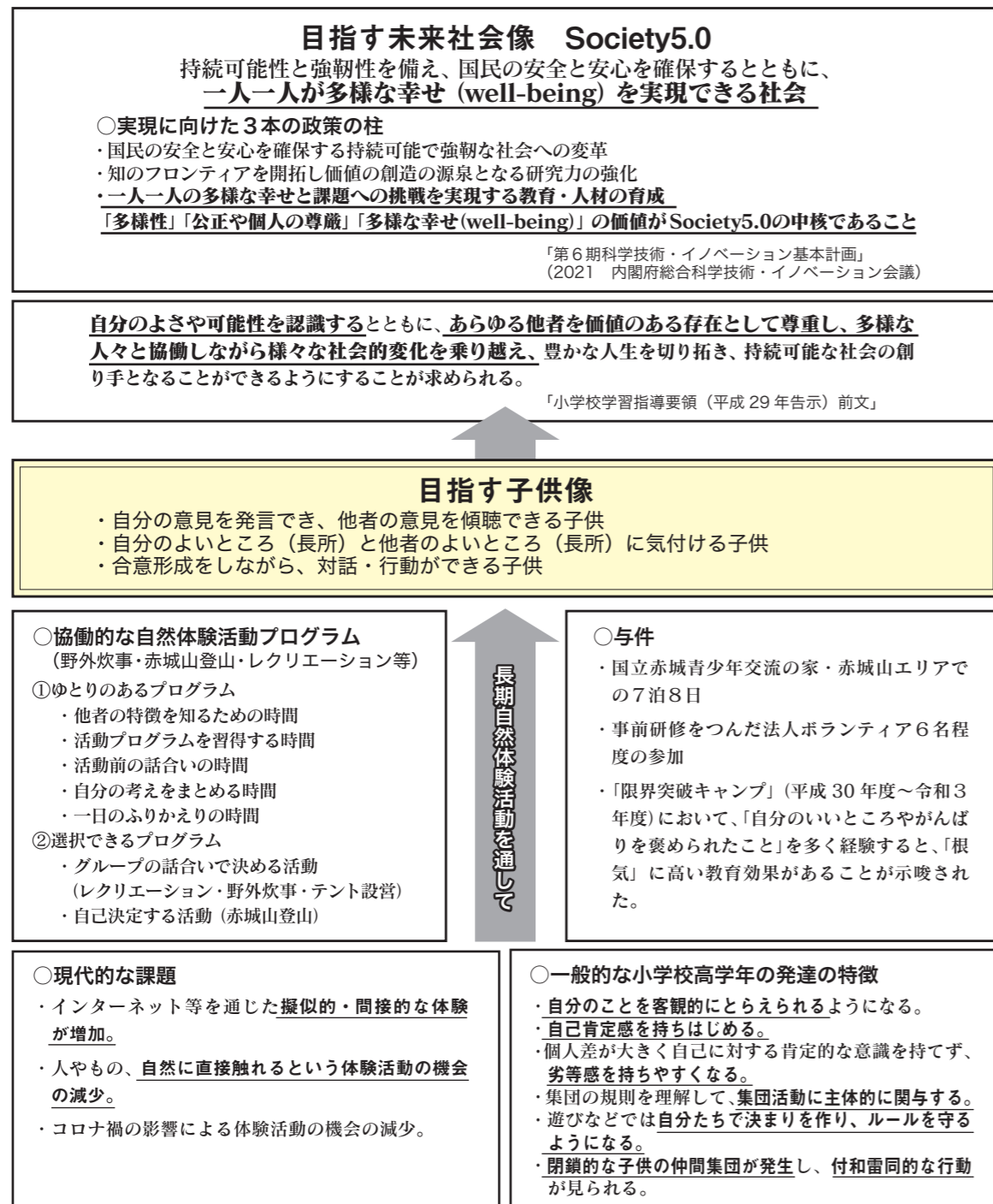
2 事業概要

(1) 事業の趣旨

- ①協働的な体験プログラム（野外炊事、赤城山登山、レクリエーション等）を通して、多様性を認め合える意識の醸成を図る。
- ②長期自然体験活動を通して、健康の保持増進（近視進行の抑制）を図る。

(2) 目指す子供像

子供たち一人一人が多様な幸せを実現できるよう、下記のような多様性を認め合える子供像を目指して事業を企画した。



(3) 令和6年度文部科学省委託事業

本事業は文部科学省の「体験活動等を通じた青少年自立支援プロジェクト」の委託を受けて実施された事業である。委託事業の内容である、「教育的効果の高い長期自然体験活動の構築・普及事業」の趣旨にあるように、青少年のリアルな体験活動の機会の充実を図るため、長期の自然体験活動等のモデル事業として実施した。実施にあたっては、これからの時代を生きる子供たちに必要な新しい時代を築く力を「多様性を認め合うこと」「健康の保持増進（近視進行の抑制）」と位置付けた。この力を子供たちが身に付けるため、①協働的な体験プログラムを通して、多様性を認め合える意識の醸成を図ること②長期自然体験活動を通して健康の保持増進（近視進行の抑制）を図ることを事業の趣旨として実施した。

(4) 手立て

- ①事業を「ファースト」「セカンド」「サード」「ファイナル」の4つのステージに分け、ステージごとにねらいを設定する。
- ②「他者の特徴を知るための時間」「活動プログラムを習得する時間」「活動前の話合いの時間」「自分の考えをまとめる時間」「1日のふりかえりの時間」を十分に確保するために、ゆとりのあるプログラムを編成する。
- ③グループ内の協議が活発になるように、活動に必要な感がある課題を設定し、グループの話合いで決める活動（グループタイム）を継続して行う。
- ④掲示物やプログラムに連続性・関連性がある活動を取り入れ、成長を感じられるようにする。
- ⑤【サード】成長ステージで、より個人の成長を実感できるように「自己決定する活動（赤城山選択登山）」を設定する。

(5) 事業概要

①期日

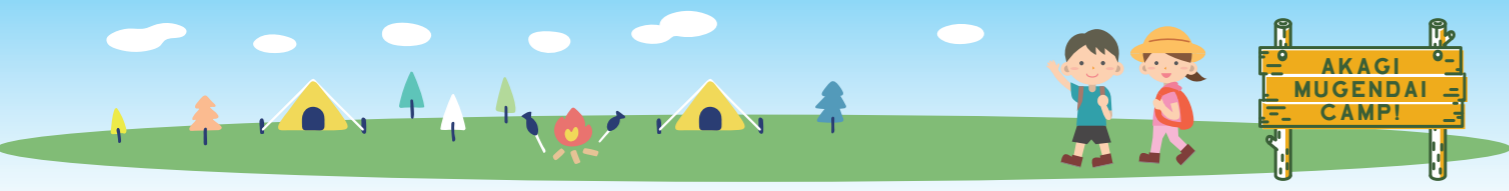
- 【ボランティア研修】 令和6年7月 6日（土）～7月 7日（日）（1泊2日）
- 【事前キャンプ】 令和6年7月13日（土）～7月14日（日）（1泊2日）
- 【本キャンプ】 令和6年8月11日（日）～8月18日（日）（7泊8日）
- 【事後キャンプ】 令和6年9月14日（土）～9月15日（日）（1泊2日）

②参加者

- 【対象】 小学5年生～小学校6年生 23名（男子12名、女子11名）
- 【人数】 小学5年生男子：8名 小学6年生男子：4名
小学5年生女子：6名 小学6年生女子：5名
群馬県：18名 埼玉県：2名 栃木県：1名 千葉県：1名 神奈川県：1名
- 【班編成】 1班5～6名で4班に編制（異年齢集団）

③スタッフ

- ・国立赤城青少年交流の家職員：3名
- ・ボランティアスタッフ：5名



(6) 推進委員会の概要

①委員の構成（推進委員2名）（五十音順）

國學院大學人間開発学部 教授 **青木康太郎**
 慶應義塾大学医学部眼科学教室 特任助教 **小川 護**

②委員会の日程と議事内容

●第1回推進委員会 5月25日(土) オンラインにて開催

(推進委員の役割)

- ・青木委員には事業実施による子供の変容に関する調査及び活動プログラムへの指導・助言。
- ・小川委員には事業実施による近視抑制に関する調査。

(実施案検討)

- ・ふりかえりシートは、ふりかえりの話し合い後に記入するとよい。また、ふりかえりシートを活用した活動ができるよう工夫して実施するとよい。
- ・ふりかえりシートは、カウンセラーの声かけの参考にもなる。

(調査検討)

- ・眼の検査については、今年度は本キャンプで2回、事後キャンプで1回実施したい。また、検査の実施時刻はできる限り同じにして実施したい。
- ・子供の変容に関する調査のアンケートは本キャンプの1日目に1回目、最終日に2回目、事後キャンプで3回目を実施したい。また、実施時間は本キャンプの開会式前後、閉会式の前後、そして事後キャンプの開会式の前に実施したい。
- ・昨年度、子供の変容に関するアンケート調査で天井効果が見られたので、今年度は調査表を変更し、より子供たちの実態にあった、実績のあるものを実施したい。

●第2回推進委員会 10月18日(金) オンラインにて開催

(事業報告)

- ・参加者アンケートの満足度が事前キャンプから本キャンプ、事後キャンプと増加していることはよかった。また、事業の成果が具体的に示されていることもよかった。
- ・登山などの危険度の高いプログラムについては、スタッフの研修や装備、運営体制について改めて確認しておくことが大切である。

(次年度の実践研究事業)

- ・次年度の実践研究事業では、その趣旨を現代的な課題から考える方法、プログラムから考える方法、積み重ねてきた成果と課題から多様性を深める方法などがある。青少年教育のナショナルセンターとして長期キャンプに取り組むことも視野に検討してほしい。
- ・文化的な体験もよいが、それぞれの自然体験がつながりをもつものにとするとさらによい。

●第3回推進委員会 12月13日(金) 書面会議にて開催

(報告書の確認)

- ・報告書の表紙デザインや内容について確認を行った。

(1) 日程

●7月6日(土)～7月7日(日) ボランティア研修（事業に参加するボランティアを対象に研修を行った。）

時間	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	宿泊場所	
1日目 7/6(土)				受付	アイツレシロ 所長講話 事業概要説明	講話(ボラ ンティア の意義・ 安全管理)	昼食 (食堂)	施設確認 (館内)	研修支援体験 (クップ・キン ボール等)			野外炊事 たき火含む(カレー作り)		入浴	つどい 退所点検 の仕方	就寝	交流の家 (本館)	
2日目 7/7(日)	起床	荷物整理	朝食 (食堂)	退所点検	赤城山登山 (覚満湖～鳥居峠～ 長七郎山～小沼)		昼食 (小沼・弁当)	帰所後 解散										

●7月13日(土)～7月14日(日) 事前キャンプ 協働的体験プログラム (■=グループプログラム、■=個人プログラム、■=共同研究)

時間	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	宿泊場所	
1日目 7/13(土)				受付	自己紹介 アイスブレイク 保護者面談	赤城山登山 (覚満湖～鳥居峠～ 長七郎山～小沼)	昼食 (食堂)	レクリエーション (クップ・キンボール)			野外炊事 (カレーライス)		入浴	登山前指導	登山準備	就寝	交流の家 (本館)	
2日目 7/14(日)	起床	荷物整理	朝食	退所点検	赤城山登山 (覚満湖～鳥居峠～ 長七郎山～小沼)	昼食 (小沼・弁当)	ふりかえり アンケート記入	解散										

●8月11日(日)～8月18日(日) 本キャンプ

時間	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	宿泊場所
1日目 8/11(日)				受付	開会式	アイツレシロ	眼の検査	チームMT① 最終日はどうやって暮らしたい? 【どんなチーム像を作ろう?】	荷物移動	夕食 (食堂)	入浴	登山前指導	登山準備	就寝	交流の家 (本館)		
2日目 8/12(月)	起床	健康観察 荷物整理	朝食	あかぎアドベンチャー プログラム	昼食 (食堂)	グループタイム テント設置	グループタイム 選択クワフト体験 (かんるさ・スプーン作り)	夕食 (食堂)	入浴	登山前指導	登山準備	就寝	交流の家 (本館)				
3日目 8/13(火)	起床	健康観察 荷物整理	グループタイム 選択野外炊事 (朝食づくり)	テント 片付け	グループタイム 選択レクリエーション (クップ・キンボールなど)	昼食 (食堂)	洗濯	グループタイム 野外炊事 (バエリア・豚汁・ごはん)	入浴	登山前指導	登山準備	就寝	交流の家 (本館)				
4日目 8/14(水)	起床	健康観察 荷物整理	朝食	赤城山登山(地藏岳) 新坂平～地藏岳～八丁峠～長七郎山～小沼	夕食 (食堂)	入浴	登山前指導	登山準備	就寝	交流の家 (本館)							
5日目 8/15(木)	起床	健康観察 荷物整理	朝食	グループタイム 選択レクリエーション (オリエンテーリング・グリーン アドベンチャーなど)	昼食 (食堂)	グループタイム 選択クワフト体験 (かんるさ・スプーン作り)	グループタイム 野外炊事 (バーベキュー)	入浴	登山MT 【どの山を登ろう?】	登山準備	就寝	交流の家 (本館)					
6日目 8/16(金)	起床	健康観察 荷物整理	朝食	赤城山選択登山 ①新坂平～地藏岳～八丁峠～小沼～おとぎの森～小沼 ②大沼～黒檜山～駒ヶ岳～鳥居峠～長七郎山～小沼	夕食 (食堂)	入浴	登山前指導	登山準備	就寝	交流の家 (本館)							
7日目 8/17(土)	起床	健康観察 荷物整理	朝食	キャンプのまとめ・発表準備	昼食 (食堂)	パーティ準備	眼の検査	お別れパーティー (選択野外炊事・レク)	入浴	登山前指導	登山準備	就寝	交流の家 (本館)				
8日目 8/18(日)	起床	健康観察 荷物整理	朝食	退所点検	ふりかえり アンケート記入	閉会式	解散										

●9月14日(土)～9月15日(日) 事後キャンプ

時間	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	宿泊場所
1日目 9/14(土)				受付	開会式	ふりかえり 本キャンプを 振り返ろう	荷物移動	昼食 (食堂)	登山前指導	登山準備	就寝	交流の家 (本館)					
2日目 9/15(日)	起床	健康観察 荷物整理	朝食	退所点検	アドベン チャーラリー	取組発表 準備	昼食 (食堂)	パーティ準備	取組発表	閉会式	解散						



(2) プログラムデザイン

【ステージについて】

事前キャンプを「【ファースト】出会い」、本キャンプを「【セカンド】獲得・グループ」「【サード】成長」、事後キャンプを「【ファイナル】旅立ち」と4つのステージに分け、参加者にステージのねらいを意識させながら実施することで本事業のねらいを達成するための手立てとした。

日程	ステージ	ステージのねらい	活動のポイント	スタッフの関わり方
事前キャンプ1日目 7/13(土)	【ファースト】 出会い	本キャンプに向けて、新しい仲間とともに協力して取り組んでいこうとする意欲をもつ。	・本キャンプに向けて、必要な心構えや道具の準備を自分なりに考える。 ・初めて出会う仲間と様々な活動に進んで取り組む。	・子供たちの緊張をほぐすために、笑顔で接し、明るく元気に前向きな態度で接する。 ・基本的な生活習慣（早寝早起き朝ごはん）や挨拶、正しい言葉遣い、整理整頓などについて指導し、意識付けを行う。 ・個人の特徴（人との関わり方などの性格）をつかみ、記録を取る。
事前キャンプ2日目 7/14(日)				
本キャンプ1日目 8/11(日)	【セカンド】 獲得・グループ	グループメンバーの個性を知るとともに、キャンプに必要な基礎知識や技能を身に付け、合意形成を図りながら仲間と協働することができる。	・様々な活動を通して、自分の得意なこと（長所）や仲間の得意なこと気付く。 ・チームの仲間を助けたり、助けられたりすることで仲間のよさに気付く。 ・キャンプ生活に必要な様々な知識、技術を身に付ける。 ・チームの中での自分の役割を理解し、その役割を果たす。	・個人とグループの特徴のをつかみ、記録を取る。 ・野外炊事などのキャンプ生活に必要な基礎知識や技術を伝え、手本となる。 ・個々の緊張を和らげ、チーム内でお互いの関わりが生まれるようにする。 ・子供たちの挑戦を積極的に励まし、認め、一人一人の意欲を高める。 ・子供たちの人間関係について実態把握し、スタッフ間の連絡を密にして支援する。
本キャンプ2日目 8/12(月)				
本キャンプ3日目 8/13(火)				
本キャンプ4日目 8/14(水)				
本キャンプ5日目 8/15(木)	【サード】 成長	キャンプの中で、できるようになったこと・意識したことを整理し、言葉でまとめることで自身の成長を実感する。	・心身の状態を考え、自分に適した登山コースを選択する。 ・日々のふりかえりを活用し、自身の成長を実感する。 ・助けが必要な場面で適切に仲間を支援、互いに協力して活動に取り組む。	・登山ルートでは、安全の確保は徹底するが、可能な限り直接的な手助けは行わず、仲間同士での助け合いを見守る。 ・キャンプスタート時の頃の自分を想起させ、やり抜いたことに対する自信を持たせる。 ・子供の体力的な様子に目を配り、体調の変化の把握に努める。
本キャンプ6日目 8/16(金)				
本キャンプ7日目 8/17(土)				
本キャンプ8日目 8/18(日)				
事後キャンプ1日目 9/14(土)	【ファイナル】 旅立ち	全日程をやり遂げたという達成感を味わい、これまでの自分と今の自分の変化や成長を見つめ、今後の自分の生き方について考える。	・チームの仲間と過ごした日々をふりかえり、自分の意見をもち発言すること、他者の意見を傾聴することの大切さを確かめる。 ・最後までやり抜いた自分を見つめ、成長を実感し、これからの生活に生かしていこうという気持ちをもつ。	・キャンプを通して学んだことを、今後の人生にどのように生かしていきたいか、しっかりと考えさせる機会を充実させる。 ・これからも、何事にも自信をもって取り組むよう言葉をかける。
事後キャンプ2日目 9/15(日)				



(3) 各キャンプの内容

ボランティア研修

1. 企画運営のポイント

- あかぎ無限大キャンプに参加するボランティアを対象に、キャンプに向けて、野外炊事・登山についての基本的な知識や技能を身に付けるとともに、ボランティアとしての役割を理解し、心構えをもてるよう企画した。
- ボランティアが見通しと余裕をもって事前キャンプに臨めるように、当該キャンプの内容に沿った研修内容を企画した。

2. 日程

日程	午前	午後	夜
7月6日(土)	集合 自己紹介・アイスブレイク 説明「事業概要説明」 講義「青少年教育施設におけるボランティアの役割」	演習「カップ・キンボール」 「テント設営の方法」	演習「野外炊事」
7月7日(日)	演習「つどい・退所点検の仕方」 実技「登山」 (覚満淵～鳥居峠～長七郎山～小沼)	説明「事前キャンプ日程確認」	

3. 主な活動内容



テント設営の方法



野外炊事



赤城山登山

4. 成果と課題

(1) 参加者アンケート結果

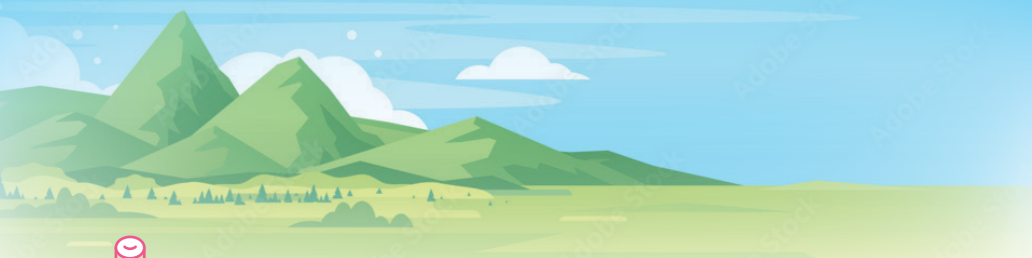
満足：2人(100%) やや満足：0人(0%) やや不満：0人(0%) 不満：0人(0%)

(2) 成果

- 実技に関する研修を通し、「ケガや事故が予測される場面や箇所を把握することができた」等の感想が多いことから、有効であったと考えられる。
- 登山を通し、ボランティア自身の体力把握ができ、子供たちとの登山についても見通しをもたせることができた。

(3) 課題

- 子供との接し方について漠然とした不安を抱えるボランティアもいるので、講義などを通し、少しでも解消できるような配慮が必要である。
- 本キャンプで実施予定のプログラム数を考えると、1泊2日の研修ですべてを網羅することは難しい。プログラムの危険度やけがのリスク等を考慮し、ボランティア研修で実施するプログラムの精選が必要である。



①事前キャンプ

【ファースト】



1. 企画運営のポイント

- (1) 本キャンプで実施予定の日程・プログラムを基に計画し、参加者が本キャンプに向けて心身の準備を進められるようにした。また、登山や野外炊事では安全指導を行い、基本的な知識・技能の習得ができるようにした。
- (2) より多くの参加者同士が交流できるようにするため、プログラムごとにチームを再編成した。
- (3) チームリーダーであるボランティアがより多くの参加者の実態把握ができるよう、プログラムごとに担当するチームを変更した。

2. 日程

日程	午前	午後	夜
7月13日(土)	開会式 自己紹介・アイスブレイク	レクリエーション (クップ・キンボール)	野外炊事 ふりかえり
7月14日(日)	登山(覚満淵~長七郎山~小沼)	ふりかえり アンケート 解散	

3. 主な活動内容



アイスブレイク



キンボール



登山(長七郎山)

4. 成果と課題 ※2名未実施

(1) 参加者アンケート結果

満足：16人(76.2%) やや満足：5人(23.8%) やや不満：0人(0%) 不満：0人(0%)

(2) 成果

- ・活動ごとにグループを再編成したことにより、参加者同士の多様な交流につながった。また、ボランティアと参加者の関係性の構築にもつながった。
- ・ボランティア主体のアイスブレイクを実施したことにより、参加者とボランティアの関係づくりにつながった。
- ・登山や野外炊事では、登りの登山者を優先したり、かまどの周りを走らないよう声を掛け合ったりする姿があり、安全指導の効果が見られた。
- ・本キャンプに向けて、自己の体力や野外炊事での改善点など課題を見つけ、本キャンプに生かしたいという前向きな感想が多く、本キャンプに向けての期待が高まった。

(3) 課題

- ・事前キャンプ、本キャンプとも、暑さへの対策が必須である。本キャンプではゆとりあるプログラム編成や健康観察を行うことで、熱中症予防に努める必要がある。
- ・登山の際、雨天やバス酔い等の影響で、予定した行程より遅れが出た。ゆとりあるプログラムの編成に加えて、参加者の登山経験等を考慮に入れた時間配分を考える必要がある。



②本キャンプ

【セカンド】【サード】



1. 企画運営のポイント

- (1) グループでの話し合いが課題解決的な内容になるよう、必要感のある課題を設定し、計画的に実施した。
- (2) 本キャンプの日程をステージごとに分け、事前キャンプから事後キャンプまでを通して、ステージのねらいを参加者が意識できるようにしながら実施した。
- (3) 【【サード】成長】ステージでは、個人で登山のコースを選択する赤城山選択登山を設定することにより、個人の成長を実感できるような活動を実施した。
- (4) プログラムに合わせた質の高い指導ができるよう、研修指導員によるプログラム指導を計画的に取り入れ実施した。

2. 日程

日程	午前	午後	夜
8月11日(日)		・開会式・アイスブレイク ・チームミーティング① ・眼の検査	・チームミーティング② ・ふりかえり
8月12日(月)	・あかぎアドベンチャープログラム	・テント設営 ・選択クラフト体験 (かな箸・スプーン)	・チームミーティング③ ・ナイトウォーク ・ふりかえり
8月13日(火)	・野外炊事 ・選択レクリエーション (クップ・キンボールなど)	・野外炊事	・登山安全指導 ・ふりかえり
8月14日(水)	・赤城山登山 (地蔵岳、小沼)	・登山ミーティング ・チームミーティング④	・ふりかえり
8月15日(木)	・選択レクリエーション (オリエンテーリング、グリーンアドベンチャーなど)	・選択クラフト体験(かな箸・スプーン) ・野外炊事	・登山ミーティング ・ふりかえり
8月16日(金)	・赤城山選択登山 (地蔵岳・黒檜山)	・赤城山選択登山 (地蔵岳・黒檜山)	・チームミーティング⑤ ・ふりかえり
8月17日(土)	・キャンプのまとめ ・お別れレクリエーション大会	・眼の検査 ・パーティ準備 ・お別れパーティ	・ふりかえり
8月18日(日)	・ふりかえり ・アンケート ・閉会式・決意表明		

3. 主な活動内容



あかぎアドベンチャープログラム



選択クラフト体験



赤城山選択登山

4. 成果と課題 ※1名未実施

(1) 参加者アンケート結果

満足：18人(81.8%) やや満足：4人(18.2%) やや不満：0人(0%) 不満：0人(0%)

(2) 成果

- ・参加者アンケートで、「みんなで相談して、楽しくレクリエーションの内容を決めることができた。」「みんなで協力してやり遂げることは楽しかったし、達成感もあった。」等の感想から、グループでの話し合いに課題解決的な課題を設定したことで、グループ内での多様な考えにふれ、互いに認め合うことにつながった。
- ・ステージごとのねらいに迫るプログラム編成を行ったことで、参加者がねらいを意識しながらプログラムに参加することができた。
- ・キャンプ後の学校生活や家庭生活の変容についての保護者アンケートには、「料理や洗濯のお手伝いをしてくれるようになった。」「運動会の副団長になった。」「困ったことや大変な時に、友達に相談できるようになった。」等の記載が見られた。本事業の経験が参加者の主体的・自発的な行動につながった。

(3) 課題

- ・研修指導員によるプログラム指導をより効果的に取り入れるため、プログラムの精選や、プログラムの時間配分の工夫が必要である。

③事後キャンプ

【ファイナル】

1. 企画運営のポイント

- (1) キャンプを通して使用したふりかえりシートをもとに取組発表を行うことで、本キャンプ後の自身の成長や変化について参加者が把握できるよう配慮した。
- (2) 既習のキャンプ技能を発揮する場として野外炊事を設定することにより、自身の成長を実感できるよう企画した。

2. 日程

日程	午前	午後	夜
9月14日(土)	開会式 本キャンプのふりかえり	チームミーティング 選択レクリエーション (各グループごとに遊ぶ) 眼の検査	野外炊事 たき火 ふりかえり
9月15日(日)	アドベンチャーラリー 取組発表準備	ふりかえり アンケート 取組発表 閉会式	

3. 活動の様子



たき火



アドベンチャーラリー



取組発表

4. 成果と課題 ※1名未実施

(1) 参加者アンケート結果

満足: 21人 (95.5%) やや満足: 1人 (4.5%) やや不満: 0人 (0%) 不満: 0人 (0%)

(2) 成果

- ・ キャンプを通して共通のふりかえりシートを使用し、記入してきたことで、参加者が自身の成長を見つめる機会となった。
- ・ 取組発表を行うことで、本キャンプの決意表明後、学校生活や家庭生活でどのようなことをがんばっているか、自身をふりかえる機会となった。
- ・ 本キャンプで実施できなかったプログラムを実施することができ、参加者の満足度も高かった。
- ・ 野外炊事では、参加者からも「みんなと協力して美味しいカレーを作ることができた。」「かまどの火の調節を上手にすることができた。」など、既習の技能を生かして調理することができたという感想が多いことから、身に付けた技能を発揮する場として効果的だった。

(3) 課題

- ・ 事後キャンプの趣旨へさらに迫れるように、参加者自身が成長を感じるとともに、キャンプをやり遂げたと実感できるようなプログラムの工夫が必要である。

(4)安全対策

①熱中症対策

- ・ ゆとりあるプログラム編成を行い、プログラムの間に休憩時間をとれる日程調整を行った。
- ・ 参加費で熱中症対策グッズ（首元冷却スカーフ）を購入し、個人に配布した。屋外での活動時は積極的に着用するよう促した。
- ・ WBGT 測定をこまめに行い、「警戒」「厳重警戒」を示しているときは、水分補給・塩分補給や休憩をするよう声かけを徹底した。
- ・ 屋外での活動時は、活動場所付近に緊急の避難所として冷房の効いた部屋を1室確保した。
- ・ グループリーダーであるボランティアは塩分タブレットや経口補水液を常備し、適宜参加者に渡した。また、グループごとの活動時は参加者の様子を観察し、十分な休憩をとるよう共通理解を図った上で活動を行った。

②登山時の安全対策

- ・ 登山コースを設定するにあたり、候補となった全コースの実地踏査を行い、参加者に適したコースを設定した。
- ・ 実地踏査では、危険箇所の確認、雨天時の対応、エスケープルートの設定などをスタッフで確認し、記録した。
- ・ ボランティア研修では、講義で登山の安全管理研修を実施した。また、実際に参加者が登る山で安全確認や実技研修を実施した。
- ・ 登山実施前に登山ミーティングを行い、参加者とスタッフ全員でコースや危険箇所を確認した。
- ・ 登山時は担当するスタッフ数を増員し、緊急車両の配備、連絡手段の確保など緊急時は迅速な対応が取れるようスタッフ配置を行った。
- ・ 登山の際には、日本山岳会に所属する研修指導員を招へいし、安全対策を強化した。

③感染症対策

- ・ 新型コロナウイルスが感染症法上の位置付けが5類に移行したが、基本的な感染症対策は継続して実施した。
- ・ テント泊においては、一人用のソロテントを使用し、感染症対策を実施した。
- ・ 手指消毒やアルコール除菌シートを常時使えるよう配置し、参加者とボランティアに対しこまめに利用するよう推奨した。

④緊急対応時フローチャート

- ・ 緊急対応時フローチャートを作成し、ボランティア研修の際にスタッフ間で共通理解を図るとともに、事前・本・事後キャンプの際には、スタッフミーティングの中で確認するようになった。

(1) 当所実施のふりかえりシートからみる参加者の変容

1. ふりかえりシートについて

【ファースト】
ねらい：本キャンプに向けて、新しい仲間とともに協力して活動に取り組もう。

<p>○7月13日の主な活動 ・アイスブレイク ・レクリエーション ・野外炊事（カレーライス）</p> <p>○今日の活動をふりかえって</p> <p>①自分の意見をしっかりとらえた (5・4・3・2・1) ②友達に意見を聞き取ることができた (5・4・3・2・1) ③自分と友達の考えの違いに気づいた (5・4・3・2・1) ④みんなが納得する決定ができた (5・4・3・2・1) ⑤グループの決定に満足している (5・4・3・2・1) ⑥決まったことに対してやる気ができた (5・4・3・2・1)</p> <p>○明日の活動で生かしたいこと 家庭生活や学校生活で生かしたいと思ったこと</p>	<p>○7月14日の主な活動 ・香城山登山 （覚満湖～鳥居峠～長七郎山～小沼）</p> <p>○今日の活動をふりかえって</p> <p>①自分の意見をしっかりとらえた (5・4・3・2・1) ②友達に意見を聞き取ることができた (5・4・3・2・1) ③自分と友達の考えの違いに気づいた (5・4・3・2・1) ④みんなが納得する決定ができた (5・4・3・2・1) ⑤グループの決定に満足している (5・4・3・2・1) ⑥決まったことに対してやる気ができた (5・4・3・2・1)</p> <p>○明日の活動で生かしたいこと 家庭生活や学校生活で生かしたいと思ったこと</p>
--	--

ふりかえりの項目について

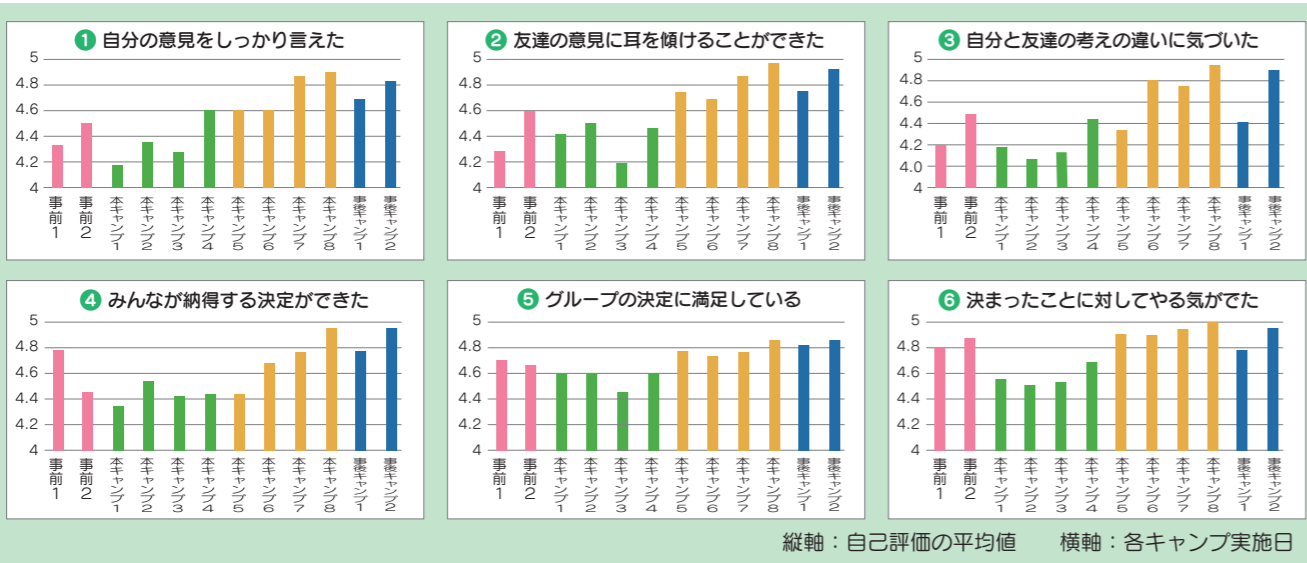
- ①自分の意見をしっかりとらえた
- ②友達に意見を聞き取ることができた
- ③自分と友達の考えの違いに気づいた
- ④みんなが納得する決定ができた
- ⑤グループの決定に満足している
- ⑥決まったことに対してやる気ができた

※ステージごとの協働的な自然体験プログラムについては、P.06 参照

本事業では、キャンプを【ファースト】出会い、【セカンド】獲得・グループ、【サード】成長、【ファイナル】旅立ちの4つのステージに分けて実施し、活動の最後に毎日「ふりかえり」の時間を設定した。ステージごとに上記のふりかえりシートを活用し、グループでのふりかえりを行った後、個人でのふりかえりを行った。

※1～5段階の自己評価で、最大値は5

2. 参加者全体の変容



考察

- ・項目①②において数値の大きな向上が見られる。活動終了後や一日の最後に、ふりかえりの時間を毎日確保し、継続して取り組んだことが伝える力や聞く力の向上に効果的だったことがわかる。
- ・項目③④⑤において数値の向上が見られる。協働的な自然体験活動プログラムへの取組が、多様性を認め合う意識を醸成する上で、効果的であったことがわかる。
- ・項目⑤⑥において、本キャンプ1日目～4日目の数値が低くなっている。繰り返し話し合いを行う中で、伝える力の高まりとともに多様な意見が出るようになり、自分の意見が通らないという場面がでてきたことが要因だと推察される。

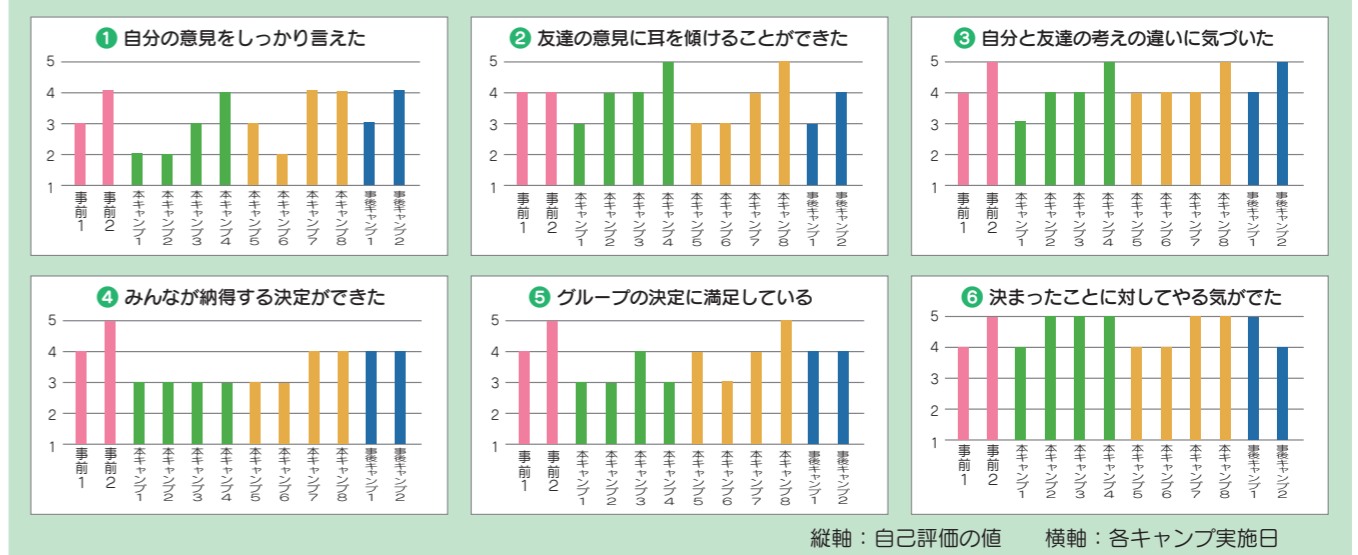


3. 変容の事例

対象児 A (小学生・女子)

A児は、事前アンケートにおいて、「出会ったばかりの人と話すことが苦手」「仲良くなれるのか心配」と回答しており、人との関わりについて不安を感じていた。一方で、「登山やレクリエーションを楽しみ、友達をたくさん作りたい」という回答も見られ、キャンプを通して人と関わりをもち、成長したいという思いが感じられた。事前キャンプや本キャンプ前半のふりかえりでは、人との関わりや活動に対して消極的なことを反省する記述が多く見られたが、ステージが進むにつれて、「話し合いの中で自分の考えを発言できた」「友達にアドバイスをするなど進んで活動できた」など肯定的な回答が増えていった。

ア 自己評価



イ 自由記述（家庭生活や学校生活で生かしたいこと）

事前キャンプ	1日目	自分の意見を言えなかったため、少しずつ自分の意見を言うようにしたい。
	2日目	1日目より自分の考えを言うことができた。友達に意見を聞くこともできた。
本キャンプ	1日目	活動のふりかえりで自分の意見があまり言えなかったため、言うようにしたい。
	3日目	考えを言ったり、人の意見を聞いたりすることが少しずつできるようになった。
	4日目	今日は野外炊事の時に、自分の意見を言うことができた。
	7日目	自分の決意表明を意識し、家や学校での生活に活かしていきたい。
事後キャンプ	1日目	レクや野外炊事で自分の考えを言うことができた。
	2日目	積極的に友達の良い所を見つかったり、意見を言ったりすることができた。

ウ 1か月後（保護者アンケート）

・様々なことに自信が付き、積極的になった。 ・自身の考えをはっきりと主張するようになった。 ・身の回りのことを自分でするようになった。

考察

- ・項目①は、各ステージ最終日に数値が最高値になっていることから、毎日繰り返しふりかえりに取り組むことで、自分の考えを発言できるようになったことがうかがえる。
- ・項目③は、②の数値が向上してきたことで、多様な意見にしっかりと耳を傾け、自身の意見との違いに気付くことができるようになったと考えられる。
- ・項目④⑤⑥においては、高い水準で推移していることから所属意識が高く、自身のグループで決定したことに對して、しっかりと守ろうとする協調性が優れていることがうかがえる。
- ・自由記述では、自身ができないことや消極的なことに対して、反省をする記述が多く見られた。日が経過するにつれ、「〇〇することができた。」「もっと〇〇したい。」というような、積極的な記述が多く見られるようになった。自分の考えを伝えることができるようになり、自信をもって活動に取り組めるようになった結果と推察される。

まとめ

ふりかえりシートから、協働的な自然体験活動プログラムを通して話し合いを行うことは、多様性を認め合いながら、対話や行動をしようとする意識の醸成に効果的であったことがわかる。また、保護者アンケートからも参加者のその後の生活にも良い影響を与えていることがわかる。



(2)あかぎ無限大キャンプにおける社会情動的スキルの変容(3年目)

國學院大學人間開発学部 教授 青木 康太郎

1.はじめに

本研究では、あかぎ無限大キャンプで目指す子ども像を踏まえ、今年度は参加者の社会情動的スキルの変容に着目し、教育効果を検証することとした。

社会情動的スキルの測定は、山田淳子ら(2023)が開発した「小学生用・社会情動的スキル評価尺度」(自尊心、思いやり、社交性、敬意、自己制御、目標への情熱、忍耐力)を用いて、キャンプの事前、事後、1か月後にアンケート調査を実施した。また、本キャンプにおける体験(以下、「組織キャンプ体験」という)が社会情動的スキルの変容に及ぼす影響を明らかにするため、西田順一ら(2002)が開発した「児童用組織キャンプ体験評価尺度」のうち、「挑戦・達成体験」「他者協力体験」「自己開示体験」「自己注目体験」を用いて事後にアンケート調査を行い、それぞれの組織キャンプ体験の程度による社会情動的スキルの教育効果の違いについて検証することとした。

分析に当たっては、社会情動的スキルや組織キャンプ体験の回答を因子ごとに得点化し(「自己制御」「目標への情熱」については、質問項目の内容を踏まえ、便宜上、逆転項目として得点化した)、各因子の平均(M)と標準偏差(SD)を算出した。次に、社会情動的スキルの教育効果を検証するため、測定時期を要因とした一要因分散分析を行った。そこで、有意な教育効果が認められた因子については、組織キャンプ体験の程度による社会情動的スキルの教育効果の違いを検証するため、組織キャンプ体験の回答をもとに参加者を多群と少群に分け、測定時期と組織キャンプ体験の多寡を要因とした二要因分散分析を行った。

2.分析結果

(1) 社会的能力の変容

社会情動的スキルの得点の推移は図1のとおりである。分析の結果、測定時期の主効果に有意差が認められたのは「思いやり」($F(2, 42) = 3.527$ $p < .05$ $\eta^2 = .144$)と「忍耐力」($F(2, 42) = 3.399$ $p < .05$ $\eta^2 = .139$)で、「敬意」($F(2, 42) = 2.996$ $p < .10$ $\eta^2 = .125$)については有意傾向がみられた。そこで、後の分析として多重比較(Bonferroni)を行ったところ、「思いやり」では事後と1か月後、「忍耐力」では事前と事後の間に有意な差が認められた。以上のことより、あかぎ無限大キャンプの体験を通じて有意に向上した社会情動的スキルは「忍耐力」であることが分かった。

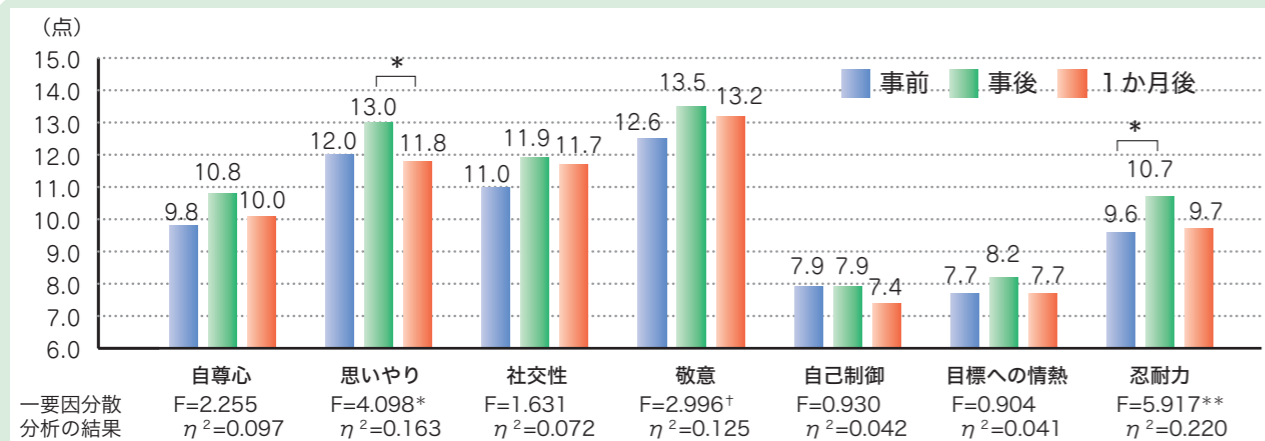


図1. 社会的情動スキルの変容



(2) 組織キャンプ体験の程度による社会的能力の教育効果の違い

有意な向上が認められた「忍耐力」に着目し、組織キャンプ体験の多寡による教育効果の違いについて検証を行った。その結果、いずれの組織キャンプ体験においても測定時期の主効果に有意差は認められたものの、交互作用(多群と低群の変容の違い)には有意差が認められなかった。つまり、組織キャンプ体験の多寡によって、「忍耐力」の教育効果に大きな違いはないという結果となった。

表1 組織キャンプ体験の多寡による「忍耐力」の向上効果の違い

変数	群	N		事前	事後	1か月後	二要因分散分析		
							測定時期	交互作用	群
挑戦・達成体験	多群	10	M	9.6	11.1	10.3	6.16**	1.42	0.31
		SD	1.7	1.8	2.1				
	少群	12	M	9.7	10.4	9.3			
		SD	2.9	2.9	2.7				
他者協力体験	多群	17	M	9.9	11.1	10.1	3.55*	0.15	1.42
		SD	2.4	2.4	2.4				
	少群	5	M	8.8	9.6	8.6			
		SD	2.4	2.7	2.2				
自己開示体験	多群	12	M	10.5	11.6	10.5	5.56**	0.04	4.25†
		SD	2.1	2.3	2.3				
	少群	10	M	8.6	9.7	8.8			
		SD	2.4	2.3	2.3				
自己注目体験	多群	14	M	9.8	11.1	9.7	4.32*	1.33	0.25
		SD	2.8	2.8	2.8				
	少群	8	M	9.4	10.0	9.8			
		SD	1.5	1.7	1.8				

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

3.まとめ

本研究の結果、社会情動的スキルのうち忍耐力に有意な変容が認められ、あかぎ無限大キャンプによって参加者の忍耐力が向上したことが明らかとなった。

長期間、親元を離れ、同年代の仲間と一緒に生活したり活動したりしていると、思い通りにならないことや不便に感じることも多く、我慢しなければならない場面もたくさん出てくる。また、メインプログラムである赤城山登山はしんどくても頑張って登り続ける忍耐力が求められる活動である。自然の中で様々な活動にチャレンジし、仲間とうまく折り合いをつけながら慣れないキャンプ生活を送る中で、徐々に忍耐力が身につけていったのではないかと推察される。

1か月後のアンケート調査で「キャンプで学んだことを生かしてやってみたこと」について尋ねたところ、「いやな事でもあきらめないこと」「自分の意見を言いつつ、相手の意見も聞き入れることができるようになった」「自分でできることは自分です」といった回答がみられた。このことから、本キャンプで身につけた忍耐力が日常生活でも活かされていることが示唆された。

本研究では、忍耐力以外の社会情動的スキルに有意な向上効果は認められなかったことや、組織キャンプ体験の多寡による忍耐力の変容の違いがみられなかったことから、今後は社会情動的スキルを高めるための工夫について検討し、プログラムの改善を図ることが課題となった。例えば、プログラムの改善では、グループで話し合ったり、協力して難しい課題に取り組むような活動の機会を増やして参加者同士の交流の密度を高めたり、1泊2日の赤城山の縦走登山を取り入れてプログラムの難易度を上げるといったことが考えられる。あかぎ無限大キャンプの教育効果を高めるには、こうしたプログラムの改善を図り、参加者の社会情動的スキルの向上につながるのかどうかを改めて検証する必要があると考えている。



(3) 慶應義塾大学医学部・国立赤城青少年交流の家・株式会社坪田ラボ・近視予防フォーラムとの共同研究

慶應義塾大学医学部 眼科学教室 特任助教 小川 護

【研究課題】

屋外活動の眼への影響の調査

【研究の目的】

約1週間の屋外活動前後で屈折値・眼のバイオメトリーデータ・ドライアイ・アレルギー性結膜炎などを評価・比較することが本研究の目的である。

【研究の概要】

国立青少年教育振興機構から慶應義塾大学医学部眼科学教室・株式会社坪田ラボに対して屋外活動と眼に関する調査依頼があり、国立赤城青少年交流の家にて毎年実施されている子供を対象とした屋外活動中心のプログラムにおいて共同研究を実施することとなった。検査測定では屈折値（近視や遠視の程度）や、眼軸長（目の長さ）など眼のバイオメトリーデータを測定し、近視に関連すると考えられている環境因子についても質問票で評価している。初年度は、令和3年度の国立赤城青少年交流の家の事業計画としての限界突破キャンプ参加者である17名を対象に、キャンプ前後で上記内容の探索的研究を行い比較した。令和4年度はあかぎ無限大キャンプとして24名が参加し、近視予防フォーラムが共同研究に加わった。プログラムの効果を評価する目的でプログラム約1か月前に行われる事前キャンプ及び約1か月後に行われる事後キャンプでも参加者に同様の測定を行った。新型コロナウイルスの影響にて本キャンプ施行直後は測定が中止となったが令和5年度は24名が計画通り4回（事前、本キャンプ前後、事後）を行った。令和6年度は昨年までの結果を踏まえ23名の参加者を対象に3回（本キャンプ前後、事後）の測定を行った。

【検査日時】 国立赤城青少年交流の家にて計3回

国立赤城青少年交流の家

1. 8月11日(日) 13:30 - 15:00 本キャンプ: 8月11日(日) ~ 18日(日) 7泊8日

2. 8月17日(土) 13:30 - 15:00

3. 9月14日(土) 13:30 - 15:00 事後キャンプ: 9月14日(土) ~ 15日(日) 1泊2日

検査者: 慶應義塾大学病院眼科視能訓練士3名、眼科医1名

【検査内容】

近視の状態と近視関連因子（ドライアイ・アレルギー性結膜炎など）の変化

1) 主要評価項目

検査機器を用いた眼球パラメーター（屈折値、収差、瞳孔径、眼軸長、水晶体厚、脈絡膜厚など）の変化量（1週間のプログラム参加前後での比較）

2) 副次的評価項目

ドライアイ（シルマーテスト及びストリップメニスコメトリー）、アレルギー性結膜炎の変化（質問表）

3) 探索的評価項目

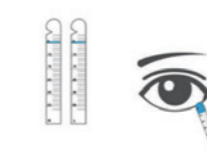
近業の際の眼から対象物までの距離、屋外活動時間、近業時間、睡眠時間、両親の近視、眼鏡装用者の眼鏡の種類などのアンケート項目（質問表）

機器を使う検査



1. IOL master 1-2分
眼軸長=眼の長さ
2. iTrace 1-2分
屈折値=近視や乱視の程度
3. OCT 2-3分
脈絡膜厚=眼の周りの厚み

試薬を使う検査



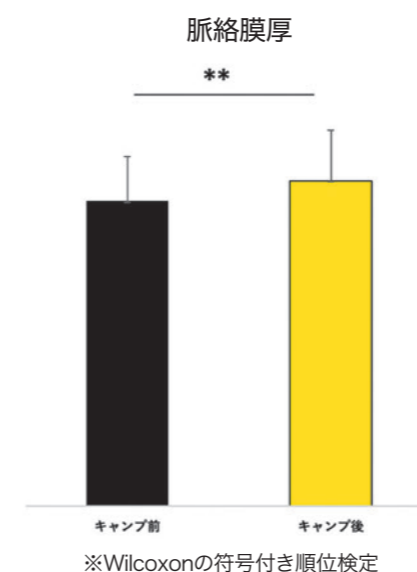
4. ストリップメニスコメトリー
涙の貯留量 15秒
5. シルマーテスト
涙の分泌量 5分

【参加者】

2024年度は23名（男子12名、女子11名）のうち小学5年生14人、6年生9人

【結果】

1週間の集中的な屋外活動は児童の脈絡膜を厚くしたことが昨年度までの結果より示された。脈絡膜厚と近視には関連性が認められており、近視が強いと脈絡膜厚が薄く、近視が弱いと脈絡膜厚が厚いことが報告されている。キャンプに参加することで脈絡膜厚が有意に厚くなったことは、1週間という短期間で近視の進行を抑制する効果が表れていることが示唆されている。本年度も本キャンプ前後の測定を行い、解析を行ったところキャンプ前に比べ脈絡膜厚が増加することが確認された。



検査風景



【展望】

屋外活動の眼に対するポジティブな影響が明らかになりつつあるが、脈絡膜厚がほぼ変化しなかった者も認められたため、元来の生活習慣や眼を含めた身体の状態などが影響するのかを検証を進める。今後は参加者を増やし大規模及び全国的な調査も期待される。今年度は前橋みなみモール眼科にてキャンプに参加しない児童の目の検診が施行される。屋外活動・キャンプ活動の重要性や効果持続期間のさらなる精査が望まれる。

(1) 成果

○参加者満足度

キャンプが進むにつれ、子供たち一人一人の多様性を認め合う意識が高まり、活動に対して主体的に取り組めるようになったことで、満足度の高まりが見られた。

【事前キャンプ】 満足：16人(76.2%) やや満足：5人(23.8%) やや不満：0人(0%) 不満：0人(0%)

【本キャンプ】 満足：18人(81.8%) やや満足：4人(18.2%) やや不満：0人(0%) 不満：0人(0%)

【事後キャンプ】 満足：21人(95.5%) やや満足：1人(4.5%) やや不満：0人(0%) 不満：0人(0%)

○参加者アンケート・保護者アンケートや参加者実態から見る成果

- ①デザインされたプログラムに単に取り組むのではなく、野外炊事のメニューや登山コース、レクリエーションの内容等について皆で話し合い、納得いく形に合意形成を図りながら決定していくことで、一人一人が主体的に活動することができ、満足度が高くなったものと考えられる。
- ②キャンプ全体を4つのステージに分け、ステージごとに設定した、ねらいに迫るためのプログラム編成を行うことで、参加者がねらいを意識しながらプログラムに参加することができた。
- ③事後キャンプの閉会式で取組発表を行うことで、本キャンプの決意表明後、学校生活や家庭生活でどのようなことをがんばっているか、自身をふりかえる機会となった。このことは、参加者は本キャンプで学んだことを自分なりにふりかえり、今後の生活に生かしていこうとする意欲につながっていると考えられる。

○本キャンプの趣旨に対する成果

(1) 協働的な体験プログラム(野外炊事、赤城山登山、レクリエーション等)を通して、多様性を認め合える意識の醸成を図る。

- ①話し合う活動を積み重ねることで、選択プログラムを決定する際に、多数派の意見だけでなく少数派の意見にも耳を傾け、多様な意見を大切にしながら決定することが多くのグループでできるようになった。また、自身の意見が採用されると、次の話し合いでは他の参加者に譲る等の他者を意識した言動が多く見られるようになった。
- ②他の参加者のふりかえりを聞くことで、多様な考え方や感じ方があることに気付く良い機会となっていた。

(2) 課題

○プログラムについて

- ①キャンプの趣旨につながるプログラム編成や運営を行うことができた。今後は、他の事業でもこれらの経験を生かし、趣旨を意識したプログラム編成や運営を進めていけるようにする。
- ②事後キャンプにおいて、事前キャンプと同様の活動内容でプログラム編成を行うことで、参加者自身が成長をより実感できるようになった。今後は、成長を感じられる他のプログラムや方法も検討する。

○参加者の安全確保・健康維持について

- ①日中の活動時における、熱中症対策に重点を置いた休憩の取り方についてスタッフ、ボランティアともに十分に確認しながら対応していく必要がある。特に屋外活動時については、冷房の効いた部屋を確保し、こまめな給水や休憩時間を積極的に設けることが必要になる。
- ②登山の緊急時等、安全なプログラム運営を行うために、適切な対応が取れるようなスタッフ増員と人員配置の検討が必要である。



(3) 推進委員より(五十音順)

子供の忍耐力を育むあかぎ無限大キャンプ

國學院大學人間開発学部 教授 青木 康太郎 氏

昨年に引き続き、あかぎ無限大キャンプの推進委員として、キャンプの教育効果に関する研究を担当させていただきました。また、今年も3日間だけになりますが、夏の本キャンプにも参加させていただき、子供たちと一緒に赤城山選択登山や野外炊事を楽しませていただきました。

赤城山選択登山では、赤城山の最高峰である黒檜山登山に参加しました。登り始めから急な坂道が続くなか、参加者同士お互いに声を掛け合いながら一步一步登っていき、誰一人脱落することなく、みんなで黒檜山を制覇することができました。登る前は不安に感じていた参加者も多かったようですが、急な山道でも自分の力を信じて最後まで登り切ったことで大きな達成感を味わうことができたと思います。山頂で昼食をとる子供たちの姿をみると、どの参加者も充実感に満ち溢れた表情をしているように感じました。

キャンプの教育効果を見ると、あかぎ無限大キャンプの体験を通じて、参加者の忍耐力が向上していることが分かりました。長期間、親元を離れ、仲間と一緒に生活したり、様々な活動に挑戦したりしていると、我慢しなければいけないことはたくさん出てきます。しかし、こうした長期キャンプならではの経験が、子供たちの忍耐力を高めたのではないかと考えます。

長期キャンプは、現代の子供たちにとって貴重な体験となります。子供の健やかな成長の機会として、今後もあかぎ無限大キャンプが継続していくことを期待しています。

協力や応援する姿勢が見えたあかぎ無限大キャンプ

慶應義塾大学医学部 眼科学教室 特任助教 小川 護 氏

本年度は国立赤城青少年交流の家における眼科検診が4回目となり、キャンプの開始直後と終了前に目に関する測定・アンケートを行わせていただきました。以前は新型コロナウイルスの影響もありましたが、今年もキャンプが無事行われ、事後キャンプ中を含めた目の測定は計3回無事に終えることができました。簡単ではない検査もある中で、短時間の中で手順を理解しご協力くださり、円滑に進めることができご協力を誠に感謝申し上げます。今回、印象的だったのは不慣れで不安もある検査の中でも、周りのお友達が励ましてくれたり、内容を丁寧に説明してくれて、乗り気でなかった参加者の不安が解消され児童が検査を行うことができた場面が何度かありました。研究や医療もチームワークとコミュニケーションが最も重要です。優しい気持ちや挑戦する姿勢がキャンプ中にも養われていったことと思います。

事前・事後キャンプも含めた多彩な経験が本プログラムの魅力だと思います。一昨年は私も家族で長七郎山に登頂し、赤城山の豊かな自然の中で過ごす素晴らしさを実感いたしました。近視の児童は著しい勢いで増加しており、この国立赤城青少年交流の家における研究により屋外活動・キャンプ生活の重要性を明らかになってきております。新型コロナウイルスの影響で増えてしまった屋内時間やデジタルデバイス使用時間の増加は近視進行に影響していると考えられ、それを防御する治療や日常生活が期待されています。キャンプを通じた屋外活動の目や体への効果を科学的に検証し、子供たちの身体発育・健康増進の手助けになれるよう頑張ってまいります。参加者・保護者の皆様の研究に対するご理解に改めて感謝いたします。

6 3年間の取組とその成果

あかぎ無限大キャンプでは、ねらいに迫るための取組を多数行ってきた。3年間の取組を通して、以下の3点はいろいろな事業で生かせる、特に成果が上がった取組である。

(1) ステージを4つに分けたプログラムデザイン

全行程を4つのステージに分け、「ステージのねらい」「活動のポイント」「スタッフの関わり方」を明確にした。ステージに分けてプログラムを実施する形は、あかぎ無限大キャンプの前身である「限界突破キャンプ」を通して得られた知見である。

ステージは【ファースト】出会い→【セカンド】獲得・グループ→【サード】成長→【ファイナル】旅立ちとし、スタッフ研修や参加者オリエンテーション等で常に現在のステージを共有するようにした。また、ステージに合わせて「仲間づくり活動」「ものづくり」「野外炊事」「登山」などの協働的な体験プログラムを系統的に、ゆとりをもって編成した。参加者とスタッフが一連の流れを意識できるようにしたことで、多様性を認め合える意識を段階的に高めることができた。

(2) 計画的な「話し合い」

協働的な体験プログラムを実施するにあたり、グループでの「話し合い」を計画的に取り入れた。グループ活動の方向性や計画を立てる「チームミーティング」、活動実施前の「確認・打ち合わせ」、活動後の「ふりかえり」など、活動中に生まれる会話やアドバイス以外の「話し合い」を計画的に取り入れることで、「自分の意見を発言でき、他者の意見を傾聴できる」「自分のよいところ（長所）と他者のよいところ（長所）に気付ける」「合意形成をしながら、対話・行動ができる」力を高めることができた。

また、「話し合い」での「スタッフ」の関わりも大切にしたい。参加者の思いや意見、考えを引き出せるような適切な声かけや場の雰囲気づくりができるよう、ボランティア研修で、インストラクターやファシリテーター、カウンセラーなどの役割を確認した。スタッフの適切な支援の上で行われる計画的な「話し合い」によって、多様性を認め合える意識を醸成することができた。

(3) その他

【参加者の変容を見取る取組】

・ふりかえりシート
参加者の変容を把握する手段として、ふりかえりシートを使用した。ふりかえりシートは、参加者には自分自身を見つめ直し、次の目標を立てる手立てとして有効であった。

・事後キャンプ
本キャンプの1か月後に実施することで、本キャンプ後の参加者の変容を見取る機会とした。また、事後キャンプは、参加者にとって本キャンプ後の取組を伝え合う場として有効であった。

【話し合いに必要な感をもたせる取組】

・プログラム構成
「話し合い」に必要な感をもたせるため、プログラムを関連させて構成した。（例：参加者が作成したはしやスプーンを野外炊事で使用する等）

【プログラム開発】

天候に合わせた登山が実施できるよう、登山ルートを開発した。今回実施はなかったが、他事業で実施可能なプログラムとなった。



(4) おわりに

新しい社会と新しいキャンプ

国立赤城青少年交流の家 企画指導専門職 平澤 輝樹

3年計画で実施してきた「あかぎ無限大キャンプ」は、今年節目の年を迎えました。毎年工夫を重ね、ブラッシュアップを図ってきたことで、キャンプを通して多くのことを学びました。

協働的な体験プログラムは、系統的・計画的に実施することで高い効果が得られました。また、体験を通じた話し合いを計画的に設けることで効果が高まりました。ボランティア研修は、話し合いの場面以外でも、不安を抱える参加者に寄り添う際に生かされました。これら多くの学びは、日々の経験をふりかえり、検討する中で得られたものでした。

節目の年を迎えた「あかぎ無限大キャンプ」ですが、今年度も関係各所や保護者の協力を得て充実した事業にすることができました。「あかぎ無限大キャンプ」を通して多くの参加者と接してきましたが、参加者がグループの仲間と協力して課題を乗り越える姿や、キャンプをやり遂げた充実した表情からは、新しい社会の創り手となる頼もしい力を感じることができました。

今後は、「あかぎ無限大キャンプ」で得られた知見を生かし、さらに魅力溢れるキャンプにつなげていきたいと思っております。

過年度の報告書



令和4年度 事業報告書



令和5年度 事業報告書

後援：群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、埼玉県教育委員会、栃木県教育委員会、茨城県教育委員会
共同研究：慶應義塾大学医学部眼科学教室、株式会社坪田ラボ、近視予防フォーラム

令和6年度 国立赤城青少年交流の家職員

所長	金澤 哲哉
次長	齊藤 裕徳
主任企画指導専門職	杉山 直弥
企画指導専門職	中山 太平/平澤 輝樹/酒井 亮介
企画指導専門職付主任	山田 堯輝
事業推進係主任	中谷 仁
事業推進係員	小野 北斗/吉武 優香/阿佐美幸子/寺田 里美/大崎 仁樹
総務係長	逸見 博俊
総務係員・看護師	鈴木 和子
総務係員	近藤美由紀
管理係長	長谷川敦子/白石 崇尋
管理係員	大崎紗也加/新藤 祐司/齋藤 克彦



令和6年度 教育事業
あかぎ無限大キャンプ 事業報告書

独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立赤城青少年交流の家

〒371-0101 群馬県前橋市富士見町赤城山 27
TEL : 027-289-7224
Email : akagi-kikaku@niye.go.jp
URL : <https://akagi.niye.go.jp>